

暗黒低温処理によるいちご促成作型の前進技術

南部分場，野菜花き部

1. 背景とねらい

いちごは年間を通して需要が多く、生産も品種、作型の開発により全国的に周年化の傾向が強まっているが、生産量の少ない秋期は価格が安定して高い。

本県のいちごは収穫期の遅い半促成や露地栽培が主要作型であり、早出し作型の導入による産地強化が急務となっている。

とくに寒冷地では夏季冷涼気象を生かし、関東以西で栽培困難な秋から収穫開始する促成前進作型の開発に期待がかかっている。

そこで、暗黒低温処理による花芽分化促進技術を利用し、促成前進作型を検討した結果、成果が得られたので参考に供する。

2. 技術の内容

1) 暗黒低温処理による促成前進作型栽培法の要点は以下のとおりである。

(1) 暗黒低温処理開始時期は7月中旬から8月上旬とする

暗黒低温処理開始時期	採苗時期	定植時期	収穫開始期
7月中旬	5月中～下旬	8月上旬	10月上旬
8月上旬	5月下～6月上旬	8月下旬	11月上旬

(2) 花芽分化のための暗黒低温処理法

冷蔵庫等を利用して、2ヵ月間程度ポットで育苗した苗を暗黒条件下で13℃±1℃で20日間低温処理する。

(3) ポット育苗の方法

① 採苗時の葉齢は2～3葉の若苗がよい

② ポットの大きさは10.5cm～12cm径程度とし、窒素施肥量はポット当たり成分で基肥0.05～0.07g、追肥0.05g程度とする。

(4) 早期良苗確保のための育苗法

ハウス育苗として1月上旬から3月下旬まで内部トンネルで保温する。

2) 暗黒低温処理による促成前進栽培の導入効果

(1) 品質、収量

① 7月中旬暗黒低温処理開始では、10月収穫開始となり年内収量がa 当たり100kg、春期(3～5月)収量は150kg期待できる。

頂果房とえき果房の花芽分化時期の間隔があくために、1～2月は収穫が中休みする。

② 8月上旬暗黒低温処理開始では、11月収穫開始となり年内収量はa 当たり70kg前後、1～2月は50kgとやや連続的に収穫でき、春期収量(3～5月)も150kg期待できる。

③ 年内収穫の平均果重は10～12g、外観的品質は優れ、食味も良好である。

(2) 経済性

①この技術の導入によって、価格の高い10～11月出荷が可能となり、粗収益、所得の向上が期待される。

②従来の作型との組合せによって規模拡大、安定継続出荷が図られる。

3) 適応品種 女峰

4) 適応地域 県中南部，県中南部沿岸

3、指導上の留意事項

1) 苗の暗黒低温処理

(1) 暗黒低温処理開始1週間前から寒冷紗等で遮光を行なう。

(2) 貯蔵中、鉢土が乾燥しないよう入庫前にポットに十分灌水をする。

なお、苗に冷風が当たらないように留意する。

(3) 出庫後、5日くらい日陰で順化させてから定植する。

2) 育苗

(1) 親株は秋植をする。本圃 a 当りの必要親株数は80株程度とし、1株当たり10本程度の子株が確保される。

栽植様式は畦幅2.7m、株間50cm(2条植, 条間30cm)を目安とし、育苗面積は0.5a 要する。

(2) 12月以降は、不織布でべたがけをし、寒風害対策を行なう。

(3) 良苗確保のため温度管理は日中25℃で換気し、灌水によりランナーの発生を促進させる。

3) ポット育苗

(1) 育苗用土は畑土又は山土にもみがらくん炭を30%混合し排水性を良くする

(2) ポット育苗は、雨よけハウス内で行う。また、鉢底からの根の発生を防ぐため、しゃ断資材を敷きその上にポットを並べる。

(3) 追肥は液肥2～3回施用し、最終追肥は暗黒低温処理1か月前までに終える。その後は、花芽分化促進のために窒素中断し、処理開始時には十分窒素が切れるようにする。

4) 定植及び定植後の管理

(1) 作畦後、定植までは雨よけ状態にして行い適期定植する。

定植は根ばちをこわして、根をひろげて植える。さらに定植直後より少量多回灌水をして、活着促進、新葉展開促進に努める。

(2) 出蕾期ころに雨よけ、黒マルチを行い、外気温が10℃以下になる時期から保温開始する。

(3) 本作型は最低気温5～6℃を確保できる地帯で無加温栽培を基本とするが、加温することにより突発的低温回避、収穫期の前進化、保温管理労力の軽減等に効果がある。